

鷗外

第八十四号

森鷗外記念会編輯

目次

鷗外の「北游日乗」に表れた 「手兎奈祠」と津軽方言「てこな」……………松木 明知	1
『後北游日乗』の足跡と漢詩 —青森～岩手……………安川里香子	18
エリーゼはユダヤ人ではない —「舞姫事件」考（その四）—……………林 尚孝	40
石黒忠恵欧州行時の漢詩……………高橋 陽一	56
木下杢太郎直筆の 「鷗外博士の訂正『オルフェウス』」の浄書原稿……………瀧井 敬子	75
鷗外と石見 —遺言の「石見人森林太郎」が意味するもの—……………池野 誠	93
「語りえぬもの」を語る —『文づかひ』再々読（中編）—……………田中 実	115
訂 正……………	135
編集後記……………	136

表紙題簽 落合直文（書簡より）

裏表紙 雅号印「鷗外」

（材質：竹 大正5年製作）

「鷗外」第八十四号（平成二十一年一月 森鷗外記念会発行） 抜刷

エリーゼはユダヤ人ではない

——「舞姫事件」考（その四）——

林
尚
孝

エリーゼはユダヤ人ではない

「舞姫事件」考（その四）

林 尚孝

はじめに

鷗外 森林太郎が一八八八（明治二一）年九月にドイツ留学から帰国し、一八九一年一月に「文づかひ」を発表するまでの二年四ヵ月間を、筆者らは、鷗外の処女作「舞姫」に因み「舞姫期」と呼んでいる。この期には、エリーゼの来日、赤松登志子との結婚と離婚、『東京医事新誌』主筆の罷免、恩師や上官との対立、西周からの義絶など、鷗外の全生涯を通じても重要な意義をもつ事件があいついでいる。この「舞姫期」に起きた諸事件を総称して「舞姫事件」と呼ぶことにした。^{①②③}

今回で第四回となる「舞姫事件考」全体の目的は、鷗外文学研究にとつてきわめて重要な問題である「舞姫事件」を総合的に解明することにある。その際、決

定的に重要なのは、「エリーゼ来日事件」であり、この問題を避けて通ることはできない。

本稿の目的は、エリーゼがユダヤ人ではないことを明らかにすることにある。初めに、この問題にかかわる既往の論文等を紹介し、エリーゼⅡユダヤ人説が生まれた背景を検証する。ついで彼女がユダヤ人ではないことを論証し、最後に誤りを生んだ原因について考察する。

なお、拙論の対象は、来日したエリーゼ・ヴィーゲルトであり、小説「舞姫」のヒロイン、エリスではない。实在の人物エリーゼの姓は、ヴィーゲルトであり、ヴァイゲルトではないことは、すでに本考の第二回で論証した。^④ 既往の研究には、以上の諸点について混乱があるので、あらかじめ指摘しておきたい。

一 既往のエリーゼⅡユダヤ人説について

このテーマに関し、まず注意を喚起しておきたい点は、第三者によつて検証可能な論拠を提示するという学術研究における最低限の手続きを欠いたまま断言されているにすぎないエリーゼⅡユダヤ人説が、あたかも「定説」であるかの如くまかり通っている現状である。実証的で手堅い論証をしている富崎逸夫でさえも、「ヴィーゲルトという姓から見て、エリーゼはユダヤ系ドイツ人であったのではと推定されるようになってゐる」と述べている。⁽⁵⁾

エリスⅡユダヤ人説への疑問や批判は嘉部嘉隆⁽⁶⁾らによつてなされている。しかし、筆者の知る限り、エリーゼⅡユダヤ人説に対する明確な批判は、いまだに誰からも提示されていない。そこでまず、エリーゼⅡユダヤ人説が生まれた経緯を辿っておきたい。

一・一 虚像と実像のエリス

来日ドイツ人女性の氏名がエリーゼ・ヴィーゲルトであると判明したのは、一九八一（昭和五六）年のこ

とである。それ以前は、小金井喜美子の回想「次ぎの兄」の記述の影響もあり、来日したのは「舞姫」のヒロインのモデルと同名のエリスと信じられてきた。川上俊之は、一九七六年に発表した「舞姫」をめぐる補注的考証⁽⁸⁾で、来日女性の名前は「エリーゼ」ではないかと推量したにもかかわらず、「虚像と実像のエリス」という項で次のように述べている。

（なお、本稿の引用文の傍線は、すべて林が加えたものである）

エリスの名だけを頼りに「舞姫」エリスの虚像と実像を追い求めようとする者は全く五里霧中の状態である。鷗外にとつては苦笑の種としかならぬエリスの問題も、実際に日本に姿を現わしたエリスの実像が強烈なだけに、しかも舞姫エリスをめぐる論文が数多いだけに、エリスの片鱗だにとらえてみたい、実証的根拠はないものかと、推理作家の如く苦悶するもの人の子として止むを得まい。

虚像のエリスについては、関良一「逍遙鷗外」、長谷川泉「続・森鷗外論考」、「鷗外の詩と眞実」、「エリス『事件ノ独乙婦人』」、竹内好「舞姫、エ

リスは空想の産物である」、清水茂「『エリス』像への一視角」等思い出すままに記しても、これまた数多くの評論が発表されており、読む者をして楽しませてくれる。

実像のエリスを求める方法としては、精養軒(築地)の宿泊名簿、ゲネラル・ウエルダ号の乗客名簿、日本渡航者の査証名簿、ケーディング家の家族構成、ドイツの戸籍役場の出生証明簿、教会の記録等を調べたり、新聞の尋ね人欄を活用することが考えられる。

本論考は、内容的には大変すぐれており、現に五年後には、ここで提案されている「実像のエリスを求める方法」のひとつである「乗客名簿」によって、エリゼ・ヴィーゲルトという氏名が特定され、来日・離日の期日も明らかにされたのである。

この段階で、川上はすでに来日女性の名前をエリゼと推定していたのに、叙述では「虚像のエリス」と「実像のエリス」の語を使っている。小金井喜美子の回想録の呪縛から逃れられなかったことが、こうした混乱をもたらした原因といえよう。

一・二 「黄なる面」の太田豊太郎

「エリスユダヤ人説」を最初に述べたのは、川副国基であり、一九七四(昭和四九)年のことであつた。⁽³⁾ 論文の冒頭で、川副は次のように記している。

「舞姫」を二葉亭の「浮雲」とともに近代的我の問題から鋭くとらえようとしたのは矢崎弾氏の「近代自我の日本的形成」(昭和18・7 鎌倉書房)であり、この方面からの研究は戦後の新しい研究法のひとつとなつたが、「舞姫」の場合、作中のエリスと同名のドイツ婦人が鷗外の帰国のあとを追つて来朝したという事実が明かにされてきてからの「舞姫」論には一種の混迷がもたらされたようである。「舞姫」はにわかに私小説ふうなものとして変貌したり、あるいは鷗外の自己保全的・自己弁明的な功利的意図を蔵した作品と見られるようにもなつた。

実在のエリスの来朝のいきさつがしだいに鷗外の系族によって明かにされてきて、そこから「舞姫」論にひとつの転機が来る過程は成瀬正勝氏の「舞姫論異説」(昭和47・4「国語と国文学」)がもっともよく伝えている。

川副も、小金井喜美子の回想によつて来日ドイツ人女性の名前を「エリス」とすると同時に、これ以後、研究上に「一種の混迷がもたらされた」ことを指摘している。ところで、川副が、エリスユダヤ人説を論じているのは、次のくだりである。

「独逸日記」によれば鷗外は帰国の一年ぐらゐ前、明治二十年六月十五日、このクロステル巷に居を移して住んでいる。そしてこのクロステル巷のあたりにはユダヤ人の街があつた。エリスはユダヤ人の少女であつたのではないかと考えられる。

このように、川副はクロステル巷にユダヤ人街があつたことを根拠に、「エリスはユダヤ人の少女であつたのではないか」と推論し、さらに、論考の結論部分で次のように指摘している。

二人相對してからのエリスの口説きは「人に否とはいはせぬ媚態」をもつた、一種の色仕掛の強迫めいたものにさえなつていて、設定された清純な処女としてのエリスの像からは程遠いものに感じられる。實在のエリスの娼婦的ポーズの一面が、思はず知らず掃出されてしまつたのではなからうか。現実のエリスの印象は鷗外の妹小金井喜美子

の伝え聞きによれば、人のよさそうなおだやかな女性だつたとされているが、娼婦だつたとすれば コケツティシユなどころがなかつたとはいへまい。

鷗外は、豊太郎のエリスにおけるがごとく、實在のエリスに時としてこういう態度を見せられていたのかもしれない。そのとき「黄なる面」の鷗外はユダヤ女性の平等感を聡明に感じとつていたのだとも思われる。

当初は作中のエリスを論じていたのに、結論では實在のエリスもユダヤ人であつたと推定するにいたつてゐる。

一・三 テレビ朝日の「百年ロマンス」

次に取り上げるべきは、一九八九（昭和六四）年に「テレビ朝日」開局三〇年を記念して制作されたテレビ番組および映画である。

篠田正浩監督による日独合作映画「舞姫」（六月三日封切）については、長谷川泉による詳しい紹介がある。映画公開に先だつて、テレビ朝日から「百年ロマンス」が放映され、これについても、長谷川は同稿の末尾で次のように述べている。¹⁰

五月七日一六時から、テレビ朝日のサンデープレセントに「百年ロマンス」舞姫の謎、黄金髪ゆらぎし少女に迫る鷗外幻想」が放映された。こがね髪ゆらぎし乙女は、鷗外の「うた日記」中の「扣鈕」の詩に出てくる。鷗外の留学時代への回想が盛られている。すでに十余年間にわたってエリーゼの実像を追求している金山重秀の執念と、テレビ朝日の田中利一の現地調査の結果が盛られていた。

私も、山崎國紀も、ユルゲン・ベルント（フンボルト大学）も、この番組に短時間出たが、まだ決定的にものを言うことは困難だと思う。鷗外よりもはるかに年長で、しかも夫のある女性で、かつユダヤ人墓地問題がからみ、問題を複雑にしている。過去百年という壁が、そして戦禍の傷あとも、調査をはばんでいることは否めない。

このテレビ放映の内容が長谷川を困惑させるようなものであったことは、「決定的にものを言うことは困難」であるとの言からも明らかである。

しかし、この番組を機に、エリーゼの姓はヴァイゲルトであると説が有力となり、エリーゼ・ユダヤ

人説が広まるきっかけとなった。

エリーゼ・ヴァイゲルトを発見するまでの経緯については、「百年ロマンス」のプロデューサーであり、演出・脚本を担当された田中利一氏から直接伺うことができた。当時は東西冷戦の最中でベルリンの壁があり、西ベルリンから検問所を通じて東ドイツ（ドイツ民主共和国）に入るなどという制約があり、現在のようには自由に取材できる状況にはなかった。そこで東ドイツの *Wochenpost* 紙に広告を掲載し、「御婆さん、曾御婆さん、伯母さんまたは大伯母さんで、姓が *Wiegert, Weigert, Wiegelt* または *Weigelt* で、名前が *Elise, Elisabeth, Lieschen* または *Liesel* に該当する女性」についての情報提供を広く呼びかけたという。*Wochenpost* は一三〇万部という東ドイツでもっとも発行部数の多い人気週刊紙であった。

これに応えて、「舞姫」のヒロインと同名同姓の *Elise Weigert* に関する有力情報が寄せられた。鷗外より年上であり、黒い髪的女性であるなど、「舞姫」のヒロインのイメージとは矛盾するところもあった。しかし、鷗外記念館 *Weber* 女史からの情報や、ライプツヒのカール・ヴァイゲルト博士の存在、エリーゼの墓や

その夫が経営したシユナイダー商会の所在地も発見されるなど多くの傍証をえて、「Elise Weigert」を来日女性と推定し、番組は制作されたという。

一・四 山崎國紀著『鷗外 森林太郎』

テレビ朝日の「百年ロマンス」の影響は大きく、山崎國紀は著書の中で、次のように述べている。^①

平成元年（一九八九）五月七日、「テレビ朝日」は、このエリーゼ問題で、一つの可能性を放映した。番組名は「百年ロマンス、舞姫の謎」黄金髪ゆらぎし少女に迫る鷗外幻想」であった。この番組は田中利一プロデューサーの意欲と執念が全編にあふれるものであった。

その取材の結果を紹介すると次の如くである。まず、この番組は、東ドイツ社会主義共和国機関誌「Wochen Post」で、エリーゼ調査について呼びかけることから始めている。その結果、エリーゼ・ヴァイゲルトなる名前でユダヤ人墓地に眠る一女性が浮かび上がってきた。しかし、判明したエリーゼ・ヴァイゲルトは、鷗外より五歳年長。そして既婚者で子供も二人あり、髪は「黄金色」

ではなく、「黒髪」であった。私は少し違うな、と唖らざるを得なかった。しかし、ことはそう簡単ではなかった。この調査で、鷗外がドイツ留学で最初の研修先となったライプツヒヒ大学病理学研究所の所長代理であったカール・ヴァイゲルト博士は、このエリーゼの従兄であったという事実が判明した。（略）

この「衛生部」は「病理学研究所」と同一建物の中にあり、この番組というエリーゼの従兄たるカール・ヴァイゲルト博士は、この「衛生部」のディレクターの地位にあった。

当然、鷗外は、このエリーゼの従兄に出会い、指導を受けた可能性がある。番組中、現ライプツヒヒ大学の三人の現役研究者たちも、その可能性を認めていた。

しかし、これだけではない。さすがテレビチームの取材力である。次のことも判明した。

鷗外が、ベルリンに戻って住んだ、あの第二の下宿から百二十メートルしか離れていない場所に、エリーゼの夫（リヒヤルト）が経営していたシユナイダー商会があったということである。

ここで例の、あれだけ気に入っていた第二の下宿を変わり、その理由を一切沈黙にふしたという事実を想起する。偶然の符合なのだろうか。それにしても、このテレビチームの掘り起こしはすごい。

しかし、一つの可能性としては理解できるが、従来の客観的資料から考えると、このエリーゼが、既婚者、子供二人、鷗外より五歳年上、黒髪等のハンデをもっていたことも否定できない。

年上の既婚者などの疑問点を指摘しつつも、山崎はテレビ朝日の取材結果を高く評価している。

一・五 『舞姫』—エリス、ユダヤ人論

最後に取り上げるのは、萩原雄一編著『舞姫』—エリス、ユダヤ人論⁽¹²⁾である。この本こそエリーゼ⁽¹³⁾ユダヤ人説を「通説」化した論考であるので、詳しく見ることにする。この書名からすれば、その主眼は「舞姫」のヒロインがユダヤ人であることを主張する点にあるかに見える。しかし結論では、実在のエリーゼ・ヴィーゲルトもユダヤ人であることを強く主張する内容となっている。

この書の冒頭論文「舞姫」再考—エリス、ユダヤ人問題から⁽¹⁴⁾は、同書の中の論稿である。著者はこの論考の目的を次のように述べている。

最近『舞姫』のヒロイン、エリスのモデル捜しが、一段とかまびすしい。エリスが実際にはエリーゼという名の女性で、森鷗外がドイツから帰国した、そのたった四日後に彼女も横浜港にやって来たことは、これまでも既知の事実とされてきた。
(この後に一行空白)

そして、その日からちょうど百年が経過したのだ。また、今年には篠田正浩監督が郷ひろみ主演で『舞姫』を映画化したことも、ブームに拍車をかけている。

さて、このような中で、先日(一九八九年五月七日)テレビ朝日系で、「百年ロマンス」と銘うってスペシャル番組を放映した『舞姫』のヒロイン、エリスのモデルを、文字通りのローラー作戦で調べ上げたのである。ところが、番組自体は(事実)と(推理)と(映画)(原作)と異なる)が錯綜していた。

そこで、この番組の母体となっている金山重秀・成田俊隆共著「来日したエリーゼへの照明」(昭和

56・8『国文学解釈と鑑賞』と金山重秀著「エリーゼの身許しらべ」（昭和59・1 同誌長谷川泉編『森鷗外の断層撮映像』）を参考にしながら、エリスのモデルの実像に迫ってみたい。

と云って、モデル捜しだけではスキヤンダルの域を出ない。だから、この小論はモデルがある程度判明した時点で、そのために『舞姫』の解釈がどう変わるか、に主眼を置いていきたい。

「エリスのモデルの実像に迫」ることによって、『舞姫』の解釈がどう変わるか、に主眼」を置くと書かれている。「―エリス、ユダヤ人論―」という副題ではあるが、実際には「エリーゼ、ユダヤ人論」から「舞姫」の解釈の変化に迫るといふ論旨であろう。

次に、「カール・ヴァイゲルト博士について」の中で、以下のように論じている。

ところで、ほくがこの論文で最重要だと考えたのは、ヴァイゲルト博士が生涯独身であったことではない。（フランクフルト・アム・マイン）という土地名と（フランクフルト市市営ユダヤ人墓地）である。（フランクフルト・アム・マイン）には、ドイツ国内のみならず、ヨーロッパでは著

名で歴史的なユダヤ人街、それも巨大なゲットーが存在するのである。つまり、カール・ヴァイゲルト博士は、ドイツ人というよりも、正確にはユダヤ人ではないか。

もちろん、カール・ヴァイゲルト博士がユダヤ人でも、ただちにエリーゼがユダヤ人だとは限らない。しかし、ヴァイゲルトもヴァイゲルトも、「ドイツでは比較的珍しい」姓なのである。たとえばそれは日本のプロ野球の選手名で、〈王〉とか〈郭〉とか〈呂〉と聞けば、やはり珍しいだろう。そして、彼らが日本語を話し、日本人と同じつくりの顔をしていても、誰もその源を日本人だとは思わない。これと同様である。

また、有名な劇作家のブレヒトは、奥方と共にナチスから逃れた人だが、彼の奥方は女優でヘレネ・ヴァイゲル (Helene Weigel) という。彼女もやはりユダヤ人である。

結局、ヴァイゲルトもヴァイゲルトもワイゲルトもヴァイゲルもヴァイゲルも、みな源は（ヴァイカント）で、ユダヤ人のファミリー・ネームである。

この主張の核心は傍線を施した「みな源は（ヴァイカント）で、ユダヤ人のファミリー・ネームである」という箇所である。そこで、これを「ヴァイカント由来のユダヤ人説」、簡略に「荻原説」と呼ぶことにする。

〔あとがき〕にかえて〕の中で、嘉部嘉隆が、川副国基の「黄なる面」で、「はじめてエリスがユダヤ人であるという説を提出」と指摘したのに対し、荻原は、「小生はシナゴグを持ち出す前に、エリスがそのファミリー・ネームからユダヤ人であることを証明するという手続きを踏んでいる」と反論し、「荻原説」がエリーゼⅡユダヤ人論を最初に提唱した論文であると主張している。

さらに、論考の締めくくりとしておかれた「舞姫」の行間に隠されたもの〕には、次のように書かれている。

さて、このように考えてくると、鷗外とエリーゼの結婚にとつて最大の障害は、この人種問題かも知れない。もしエリーゼがドイツ人だったなら、当時の日本とドイツの関係からいっても、無理やり追い返すほどの差し障りがあったとは思えない。でも、彼女がユダヤ人だったとなると、情況は一変するのではないだろうか。とりわけ、義

弟の小金井良精あたりから、森家にもドイツにおけるユダヤ人の地位が正確に伝えられたはずだ。つまりは、エリーゼがユダヤ人であったために、鷗外とエリーゼとの結婚に支障が生じたというニュアンスの結論である。注目すべき点は、荻原がエリーゼ来日の目的を「結婚」にあるとしていることと、エリーゼ帰国の理由を彼女がユダヤ人であることに求めていることである。

二 エリーゼはユダヤ人ではない

この荻原雄一の論考は、エリーゼⅡユダヤ人説をめぐる事態を一変させた。「舞姫」の舞台設定などからの推論とは違い、姓の由来という「事実」にもとづいて、来日女性エリーゼはユダヤ人であったと主張したからである。筆者も当初はこの論考を（画期的な）ものと評価していた。ヴァイゲルトもヴィーゲルトも、ヴァイカントという姓に由来し、これはユダヤ人特有の姓であるという「事実」を発見したことで、「舞姫」のヒロイン・エリスだけではなく、来日ドイツ人女性エリーゼもユダヤ人であると断定できる根拠が示され

たと考えたからである。

そこで「ヴァイカント」について調べ始めた。しかし、萩原はその出典を示していないため、その真偽を確かめるには多大の時間を要した。

最初に試みたのは、「萩原説」でヴァイゲルトを含む姓の「源」と結論されている「ヴァイカント」を探し出すことであった。しかし、この語の綴りが示されていないこともあり、すぐに行きづまった。英語で子爵を意味する *viscount* はヴァイカウトと発音するので、あるいはこれかと思ったが、完全に同じ発音ではなく、ユダヤ人の姓との関連も見出だせず、結局、これについては調査を放棄せざるをえなかった。

次に、世界中の二七二以上の言語について英語で定義を与えている「ウイクシヨナリー」の付録にある *Jewish surnames* を調べたが、ここにも手がかりはなかった。

さらに、ヴァイゲルトもヴァイゲルトも、ユダヤ人のファミリー・ネームとして一般的であるとすれば、インターネット百科事典の「Wikipedia」に載っているのではないかと考えて検索した。「Wikipedia」には数百にのぼるユダヤ人姓が掲載されていた。因みに、「Wi-

についてみると、「Wachsmann」から始まり「Wolfowitz」に終わる三六のユダヤ姓が載っていた。ここには、「Weigert」も「Wiegert」も記載されていない。「Wikipedia」の記述に問題があることは承知しているものの、ごく一般的なユダヤ姓が記述漏れになるとは考えにくく、「萩原説」への疑問を深める結果になった。

以上のような経過を経て、二〇〇六年三月一日にドイツ連邦共和国大使館を訪問し、通訳・翻訳部長のベアテ・フォン・デア・オステン女史に、ドイツにおけるユダヤ姓について教えを乞うた。確かに、その姓からユダヤ人として認識される姓はありとして、多くの姓を例示された。しかし、一般論として、「*Wiegert* も *Wiegert* もその姓だけからはユダヤ人であると判断することはできない」との回答を得た。その際、「*Elise*」を「*Eliese*」と綴ることはなく（その後、例外的に *Eliese* と綴る例もあるとの連絡あり）、これは一世紀前の名前であり、現在ではほとんど見ることがない。また、*Elise* は *Elisabeth* の短縮形であり、現在のドイツでも少数の *Elisabeth* 名はあるとご教示いただいた。

この段階では、エリーゼがユダヤ人であるかどうかについて裏づけ資料に基づく結論を得た訳ではない。

だが、「ヴァイカントを源とするユダヤ人」説には問題があることは明らかであった。

そこでさらに調査をすすめた結果、ついに Wiegert がユダヤ人の姓ではありえない事実を確認することができた。それは、ナチスによる大量虐殺の犠牲者名データベース「The Central Database of Shoah Victims' Names」⁽¹⁵⁾にこの姓が採録されていない事実を発見したからである。このデータベースはエルサレムにあるホロコースト記念館 Yad Vashem (ヤド ヴァシエム) が作成したもので、そこには半世紀余をかけて集められたホロコースト犠牲者三百万人余の姓名が、その根拠史料とともに登録されており、すべてインターネットで検索可能である。当然のことであるが、ここに採録されている名前はすべてユダヤ人である。そこで Wiegert について検索したところ九四人の該当事者が記載されていた。

Wiegert の最初に記載されているのは、Bodlaender Ruth という女性である。彼女についての説明を見ると、「Ruth Bodlaender 旧姓 Wiegert は Breslau で一九〇七年に生まれた。Ruth はホロコーストで殺害された。この情報は、彼女の義姉妹から一九九九年五月二

六日に提出された(左に掲げた)証明書に基づいている」とある。掲載された Wiegert のうち五〇名がドイツ国籍である。

この例から分かるように、実に詳細かつ正確なデータベースであると考えてよい。ちなみに、Wiegert は二三〇人という多数の名前が記録されているが、ドイツ国籍の犠牲者は七名であり、過半数の一三〇名がポランド国籍に属している。

来日女性の姓である Wiegert については「該当事者な」(We're sorry, but we can't find any results that fit your query)と表示され、三百万人のなかに一人も Wiegert 姓は存在しないことを確認しえたのである。

その後も調査を続け、二〇〇五年に刊行された Lars Menk 編纂の A Dictionary of German-Jewish Surnames と題する辞書⁽¹⁶⁾があることに気づき、購入した。一九六一年生まれの Menk は、二十歳台に偶然祖先がユダヤ人であることを知り、ユダヤ姓について調査を始めたという。彼は、ドイツにおけるユダヤ人の姓に関する類書がないことを知り、辞書編纂を決意したという。

この辞書は、一九世紀前半を中心に、第一次大戦前のドイツ領内におけるユダヤ人の姓一万二九〇〇以上

を、語源、市町村別に収めたものである。八〇〇頁を越す本書には、ユダヤ姓の歴史、都市別ユダヤ人人口などの論稿も含まれている。辞書部分には六七〇頁が当てられている。なお、採録されている姓だけならば、すべてインターネットで見ることができる⁽¹⁷⁾。この辞書

で明らかになったのは、問題の Weigert も、ユダヤ人本来の姓ではなく、南部および中部地域のドイツ人の姓であることであった。その語源は「weigen」（拒む）の意をもつ男子の名であり、それが姓に転用されるようになったという。さらに重要な点は、この辞書に Weigert が採録されていない事実である。

以上から、Weigert はユダヤ人の姓でもありうるが、Weigert はユダヤ姓ではありえないことが確認された。来日したエリーゼがユダヤ人であったとする説は、その根拠を完全に失ったと考えてよい。

三 歪められたエリーゼ像

来日したエリーゼ・ヴィーゲルトに関する諸論稿には、事実の裏付けがないまま、その人物像を憶測しているものが少なくない。筆者だけでなく、中川浩一も、

巷間に流布する歪められたエリーゼ像に対して抗議している⁽¹⁸⁾。ユダヤ人説を含め、不正確なエリーゼ像について以下に例示し、そのよってきたる原因を検討しておきたい。

三・一 エリーゼとユダヤ人説

萩原雄一は、エリーゼを「ファミリネームからユダヤ人である」として、「ユダヤ人にはパスポートが出ていませんよね。(略)」「鷗外の実際の恋愛相手もユダヤ人だとは思うし、追い返される一番の原因も、ドイツ人ではなくユダヤ人だったことだと僕は考えている」などと述べている⁽¹⁹⁾。さらに、来日ドイツ人女性のパスポート問題から、パスポートを借りて来日した可能性もあり、「ヴァイゲルトとかヴィーゲルトという姓ではないユダヤ人」来日の可能性まで論じている。

ここまで来ると、「萩原説」は、推測に推測を重ねた、妄想の世界での立論というほかはない。

三・二 朝日新聞と文藝春秋による賤女説

賤女エリーゼが、ベルリンに戻ってから、小池正直

と手切れ金交渉を行ったという説が山崎國紀によって、朝日新聞紙上に掲載された。この主張の誤りは、筆者がいち早く指摘した。⁽²⁰⁾その後、『文藝春秋』に同じ主張が八頁にわたり掲載された。それに対して、上田正行が拙論を強く支持する論文を発表し、続いて平林司、荻原雄一の両氏からも反論が出された。山崎の誤説は明らかであるが、その誤りを認めてはいない。⁽²¹⁾山崎の主張は、来日女性が「舞姫」のエリスであるとの根拠によるものであるが、エリスとエリーゼは区別して議論しなければならない。

三・三 朝日新聞記事などの歪められた報道

エリーゼの姓を、ヴァイゲルトとする説とヴァイゲルトとする説が、鷗外研究者を二分してきた。筆者が論証したとおり、ヴァイゲルトである確率はゼロに等しい。⁽²²⁾しかし、少なからぬ数の研究者が、相変わらずヴァイゲルト説を主張しているため、テレビを始め、雑誌、新聞などに、ヴァイゲルト説やユダヤ人説などが流布される結果を招いている。

このヴァイゲルト説が、テレビ朝日の特別番組「百年口モンス」をミスリードする結果となったことは前

述のとおりである。ローラー作戦でヴァイゲルトを追い求めさせた研究者の責任は重い。

『新潮45』には、「舞姫」の記述を根拠としたヴァイゲルト説が主張され、ワイゲルト説がヴァイゲルト説を凌駕するという記述が発表されている。⁽²³⁾

さらに、朝日新聞紙上に二頁にわたり、来日女性の名前がエリーゼ・ワイゲルトであることを強調する記事が掲載された。ユダヤ人墓地探しの記事から、朝日新聞はエリーゼユダヤ人説を取っているものと見られる。二七年前、エリーゼ・ヴァイゲルト来日の史料をスクープし、「エリーゼ来日事件」解明に画期をもたらした朝日新聞が、来日ドイツ人女性について歪めた像を報道している現状は、まことに残念である。この記事は、単行本に収められ、誤ったエリーゼ像を拡散させ続けている。⁽²⁴⁾

三・四 エリーゼ像を歪めた原因の検討

本稿では、エリーゼがユダヤ人ではありえないことを、論証した。この他にも、賤女説、売春婦説、財産目当ての来日説、無教養説など、事実と反すると思われる説が数多く述べられてきた。ここで、こうした諸

説が生まれる原因について考究しておきたい。

第一に、来日ドイツ人女性に関する資料が少ないこと。鷗外が、彼女についての情報を徹底的に湮滅したからであろう。利用できる資料は、小金井喜美子の回想や森於菟および小堀杏奴の伝聞などのほか、小金井良精・石黒忠恵・西周らの日記、新聞の記録（乗客名簿）や鷗外の日記や手紙と作品などである。いずれも、エリーゼ像を確定できるような資料ではない。

第二に、小金井喜美子の「次ぎの兄」の記述が、あたかも「舞姫」のヒロインその人が来日したと思わせるものであったこと。これにより、作中のエリスと実在のエリーゼを同一視する考えが生まれた。そこから、「舞姫」の舞台がユダヤ人が多く住むクロステル巷に設定されていることから、エリスはユダヤ人と推定され、それがそのままエリーゼに適用される結果となった。

第三に、船客名簿にはエリーゼ・ヴィーゲルトとあったにも関わらず、「舞姫」のヒロインの姓ヴァイゲルトをエリーゼの姓と誤認し、これが多くの研究者に支持されていたこと。

第四に、テレビ朝日による現地調査などで、実在し

たエリーゼ・ヴァイゲルトなる女性を姪にもつユダヤ人医学研究者が発見され、しかも、この研究者と森林太郎に接点があった可能性が明らかになったこと。

第五に、「ヴァイゲルトもヴィーゲルトもヴァイゲルもヴァイカントを源とするユダヤ人である」という典拠が明示されていない断言を正しいと信じたこと。

以上のような経過を辿って、エリーゼ＝ユダヤ人説が広まったと考える。一番大きな原因は、「舞姫」のエリス＝エリーゼとの思い込みにあるのではないか。

ユダヤ人説以外の歪んだエリーゼ像も、小金井喜美子の回想録をそのまま信じて、「舞姫」の中のエリスにエリーゼを重ね合わせることから生じている。

おわりに

本稿は、来日ドイツ人女性エリーゼ・ヴィーゲルトがユダヤ人ではありえないことを、客観的資料から論証した。すなわち、ホロコーストによる犠牲者三百万人のユダヤ人データベース¹⁵、及び第一次大戦前のドイツ領ユダヤ人姓を一万二九〇〇以上を集めた辞書のい¹⁶

ずれにも、ヴィーゲルト (Wiegert) 姓は見出しえない事実を提示した。

小説「舞姫」のヒロイン・エリスをユダヤ人として作品の解釈をすることは許されよう。だが、実在のエリーゼ・ヴィーゲルトをユダヤ人だとする説は、事実の裏付けを欠いた主張であるというほかはない。

もし荻原雄一氏が、依然として「Wiegertも Wiegertもヴァイカントを源とするユダヤ人である」との主張を維持するのであれば、その根拠を、誰もが確認しうるデータを添えて、提出される義務があろう。

本稿作成に際し、多くの助言をたまわった畏友二村一夫法政大学名誉教授ならびに共同研究者小平克氏に、また、取材に快く応じてくださった元テレビ朝日プロデューサー田中利一氏に対して、深甚なる感謝を捧げたい。

引用文献

- (1) 小平 克：『森鷗外論―「エリーゼ来日事件」の隠された真相』、おうふう、二〇〇五年四月
- (2) 林 尚孝：『仮面の人・森鷗外―「エリーゼ来日」

三日間の謎』、同時代社、二〇〇五年四月

- (3) 林 尚孝：『舞姫事件』研究の意義とその重要性―「舞姫事件」考(その一)―、『鷗外』八一号、二〇〇七年七月

- (4) 林 尚孝：『来日ドイツ人女性エリーゼ・ヴィーゲルトである―「舞姫事件」考(その二)―』、『鷗外』八二号、二〇〇八年一月

- (5) 富崎逸夫：『エリーゼはなぜジェノア経由で帰国したのか』、『鷗外』五七号、一九九五年七月

- (6) 嘉部嘉隆：『舞姫』についての諸問題(二)、『森鷗外研究』5、一九九三年一月

- (7) 小金井喜美子：『次ぎの兄』、『冬柏』五月号、一九三七年(岩波文庫『森鷗外の系族』所収)

- (8) 川上俊之：『舞姫』をめぐる補注的考証―「エルンスト・ブライトプロイ」のこと等―、『鷗外』一八号、一九七六年一月

- (9) 川副国基：『黄なる面』の太田豊太郎、『瀬沼茂樹古稀記念論文集』、河出書房新社、一九七四年一月

- (10) 長谷川泉：『日独合作映画「舞姫」を観て』、『鷗外』四五号、一九八九年七月、

- (11) 山崎國紀：『鷗外 森林太郎』、人文書院、一九九二年一二月
- (12) 荻原雄一編：『舞姫』—エリス、ユダヤ人論—、至文堂、二〇〇一年五月
- (13) 荻原雄一：『舞姫』再考—エリス、ユダヤ人問題から、前掲書九—二七頁、初出『文学界』、文藝春秋、一九八九年五月二六日
- (14) http://en.wiktionary.org/wiki/Appendix:Jewish_surnames
- (15) http://www.yadvashem.org/wps/portal/int/p/_s7_0_A/7_0_9E
- (16) Lars Menk: A Dictionary of German-Jewish Surnames, 824pp. Avotaynu, 二〇〇五年五月
- (17) <http://www.avotaynu.com/books/MenkNames.htm>
- (18) 中川浩一：エリーゼの身元調べはもうやめよう、『森鷗外記念会通信』一五九号、二〇〇七年七月
- (19) 荻原雄一・金子幸代：対談『舞姫』をめぐって、『鷗外』六三号、一九九八年七月
- (20) 山崎國紀：『舞姫』モデルの消息記す、朝日新聞夕刊、二〇〇五年二月二三日
- (21) 山崎國紀：鷗外の恋人は『賤女』だった、『文藝春秋』六月号、二〇〇五年五月
- (22) 上田正行：エリーゼは『伯林賤女』に非ず、『鷗外』・漱石・鏡花—実証の糸、翰林書房、二〇〇六年七月（初出二〇〇五年一〇月）
- (23) 平林 司：『鷗外の恋人は『賤女』だった』への異見、『鷗外』七八号、二〇〇六年二月
- (24) 荻原雄一：『鷗外の恋人は『賤女』だった』に反論する、『鷗外』七八号、二〇〇六年二月
- (25) 山崎國紀：『評伝 森鷗外』、大修館書店、二〇〇七年七月
- (26) 福田ますみ：『森鷗外『舞姫事件』の真相』、『新潮45』二月号、三四—三六頁、二〇〇六年一月
- (27) 保科龍朗：ひた隠しにされた素性・森鷗外と「エリス」、朝日新聞朝刊be版、e1—e2、二〇〇七年三月三日
- (28) 朝日新聞be編集グループ：『愛の旅人 II』、朝日新聞社、二〇〇七年八月